

大分県日田市にある咸宜園は、江戸時代後期の学者広瀬淡窓の私塾で、市によると、明治30(1897)年まで前身を含め92年間続き、5千人もの塾生を輩出しました。このような、全国から来て勉学に励み、郷里に帰って学校を創った名もなき先人が、国の礎となる教育を作りました。広瀬家の家訓は「心高身低」で心は気高く、身は低くして世を渡るといふ姿勢の意味です。咸宜園には儒学者、武士、農民、僧侶など多様な塾生がいたのですが、学力だけではなく、人間性や社会性の養成に

## 心高身低

岐阜薬科大副学長 原 英彰



力を入れたそうです。

当学の学生にも、いわゆる知識や学力を付けさせるだけではなく社会において必要な社会性、人間力、会話力、調整能力、問題解決能力などを身に付けさせるようにしています。もう一つ大事なことは物事に取り組む姿勢です。物事を成功に導くためには、やる気(情熱)が必須です。何人の学生の内なる心に火をつけることができるかです。

いくら能力(コップ)があっても、コップが立っていないければ、そこに知識(水)を注ぎ入れることはできません。いかに

してコップを立たせることができる(やる気を起こさせる)かです。そのためには、人それぞれの価値観や性格をしっかりと把握して、頃合いを見て背中を押してあげることが大事です。さらに、「いつでもどこでもやる気を起こすことができる学生を育てる!」ことです。

しかし現実には、自分自身がまだ心高身低の精神で学び続けることが必要なようです。「教つるは学ぶの半ばなり(書経)」と言いますが、学生を教育するには、まだまだ時間がかかりそうです。まだまだ……道半ばです。